慈円「略秘贈答和謌百首」検証

石川　一*

要旨

慈円『略秘贈答和謌百首』は、西山隠棲期における作品で、内題右下に「本ニハ二首ツヽ載之。其間哥一首斗程闕在之」の注記があり、本百首の呼称が贈答歌形態（二首で一対をなす）に由来していることが確認できる。

前稿「慈円『建暦歴三年日吉百首』考」で、本百首から書陵部蔵『慈円百首』（150・363）を経て、建暦三年「日吉百首」へと発展してゆく進展過程を立証したが、その指し示す宗教内容に深く触れることが出来なかったので、本稿で改めて検討したいと思う。

西山隠棲期の著述を精査することによって、本百首が叡山教学と深く関連していることが分かる。同時に、台密の集大成者としての安然などの教学に深く依拠していることが確認できる。

キーワード：厭離欣求百首、叡山教学、安然、胎蔵界・金剛界、大日如来

慈円『拾玉集』第三帖所載「略秘贈答和謌百首」に次の歌が見え、同時に第二帖所載「日吉百首」にも一致もしくは類似する歌が存する。歌番号・本文は多賀宗隼『校本拾玉集』に拠る。

三悪の家にはなにかかへるべきいでにしものを五相成身（三六四〇）

（第三句「本ニかくるへきトアリ、帰るへき歟」の校異）

かならずよ夜はの煙と身をばなせ以字焼字の法のむくひに（三六四一）

後者は「日吉百首」と完全に一致するが、前者は次の歌に差し替えられている。

今はよもまどひすてゝし六の道にかへらじものを五相成身（二二八四）

（初・二句「世も迷も捨て」見せ消ちで「よもまとひもすてゝし」の校異）

前稿[1]では、「略秘贈答和謌百首」から書陵部蔵『慈円百首』（150・363）を経て、建暦三年「日吉百首」へと発展してゆく進展過程を立証

平成30年9月10日受理　*文学研究科国文学専攻　教授

したが、その指し示す宗教内容に深く触れることが出来なかったので、改めて検討したい。

本百首には「日吉百首」との重複歌の中に、次のような歌があり、その存在により、両百首の成立はかなり絞られる。

逢ひがたき法に近江の山高み三たび来にける身をいかにせん

（三四六五・日吉百首二〇八二）

「三たび来にける身」とは建暦二年正月十六日の座主就任第三度をさす。また「日吉百首」跋には「建暦二年壬申秋九月草之」と草稿本の詠歌年次が記載され、しかも「二年壬申秋九月草之」に見せ消ちで「三年癸酉待三春記一篇而已」の校異に拠り、清書本の完成年次が判明するのである。したがって、両百首共に座主就任以後に詠まれたことになる。

そもそも「略秘贈答」とは浅略深秘の約であり、通り一遍の浅く簡略なことと、深奥な秘密の教えという、相反する二つの概念を対照させようとの意図のもとに「贈答和謌」という形態を取ったものと思われる。[2] なお、対をなす二首の中央上部に部立を示す語が記されている。版本六家集本を除く他の伝本は、春三・夏一・秋一一・冬四・恋一・山家三・閑居一・神祇二[3]・釈教五・述懐二〇という変則的な構成である。

冒頭六首（三対）を見ると、

（a）音羽山深き霞を分け入れば大津の宮に春の花園（三五八二）

春

春来れば打出の浜のはま風に長等の山を志賀の山越え（三五八三）

（b）花にあかで花をあはれと思きぬ散るならひまでわれになしつゝ

（三五八四）

同

月にあかで寝待ちの空を待からに来ん世の闇を思知るかな（三五八五）

（c）吉野山そもむつましきながめ哉花待つ峰にかゝる白雲（三五八六）

同

うき雲を厭ふ心にうれしきは月待つ山の峰の松風（三五八七）

版本六家集本のみ（b）（c）例が「秋」「同」となっている。（b）（c）双方の左歌は秋にふさわしい内容であるが、全体の構成からも例外[4]と考えざるを得ない。（版本六家集本以外の伝本はすべて「春」となっているので、おそらく版本六家集本のみ合理的な処理が為されたものか。）

（a）においては、当該百首が「日吉百首」に進展ゆくことからも、その跋「奉納神居筆」からも、日吉社という帰着点が見えてくる。「音羽山」「大津宮」に対して「打出濱」「長等山」「志賀山越」を配する。

（b）においては、現世無益を主題として「哀（あはれ）」「（花の）

散る慣ひ」に対して「来世の闇」を配する。また（b）の「花にあかで」「月にあかで」、（c）の「花待つ峰」「月待つ山」のように、歌句の対比（詩型の類似を含む）が認められる。

そもそも青蓮院本『拾玉集』本文に錯綜があるのは数多の押紙（九件）が存在しているからであり、[5]『校本拾玉集』はそれをその位置に翻字していることに拠る。この押紙には「正本」と合致するもの[6]もあるが、他百首の歌も混入しており、これら別草はかなり複雑な様相を呈している。明確な位置付を持たないものを含む別草は捨象するにしても、青蓮院本底本と「正本」との異同は「略秘贈答和謌百首」にも推敲が為された事を物語っている。

この「略秘贈答和謌百首」と建暦三年「日吉百首」との間に、一七首もの重複歌[7]を見出し得る。また「略秘贈答和謌百首」には「以上百首大略併詠改了、乍百首入撰集之程計とて奉納神居畢、具有別草」という跋があり、神居に奉納したことを示している。同様に、建暦三年「日吉百首」底本（清書本）の序に「詠百首和歌清書以法楽十禅師宮」とあり、日吉七社中の十禅師宮に法楽したことを伝えている。しかし、日吉社法楽という企画の意味からすると、重複歌のある二種の百首が奉納されることは考えられないので、これについては前稿に譲ることにしたい。[8]

両百首における、前掲の三例以外の歌の組み合わせに倣って具体的に検討してみたい。但し、歌の逸脱などの問題は一先ず解決したので、これ以後は歌本文・番号などは特に断らないかぎり『新編国歌大観』に拠ることにし、番号を半角横向きアラビア数字で表記することにする。

①郭公松に来鳴かぬ声なれば常磐の杜に聞事もなし（3375）
夏

われは又待つに嬉しき命とて老蘇の杜に泣く事もなし（3376）

前歌の「松」は「待つ」を掛ける。「来鳴かぬ」は「郭公思はずありき木の暗のかくなるまでに何か来鳴かぬ」（万葉・巻八・一四九一　大伴家持）に拠り、郭公を松ではないが待っているのに、なかなか来て鳴いてはくれないので、常磐の杜で鳴き声を聞くことはないの意。また後歌は「東路の思出にせん時鳥老蘇の杜の夜半の一声」（後拾遺・夏一九五　大江公資）のように「老蘇の杜」は郭公に関係の深い歌枕で、時鳥を待つのが嬉しいと同時に極楽往生を待つことに掛ける。私は郭公を待つのが嬉しいが、同じように極楽往生を待つのが嬉しいので、老蘇の杜で泣くこともないの意。

「常磐の杜」「老蘇の杜」という歌句の対照の他、「～事もなし」という詩型の類似も見られる。

②染めておろす峰の紅葉のくれなゐを袖より外の物とやは見る（3381）
同（秋）

出でよ月憂き身世に住まぬ山の端を心のほかの空とやは見る（3382）

前歌は「紅に涙し濃くは緑なる袖も紅葉と見えましものを」（後撰・恋八一二　読人不知）のように、紅葉の色に「紅涙」を掛ける。木の

葉を紅に染めて吹きおろす紅葉を、袖とは関係のないものとは見ないのだろうかの意。後歌「心のほかの空」は「散る花を惜しまばとまれ世の中は心のほかの物とやは聞く」（後拾遺・雑一一九一　伊世中将「三界唯一心」）に拠り、仏の比喩である月よ出でよ。憂き身は辛くはかない住まないこの世の山の端を、心と無関係のものと見るだろうかの意。

反語「やは」を含めて、「ほかの～とやは見る」という詩型の類似も見られる。

③もろともに鹿こそは鳴け暮の秋もみぢ散る山の峰の嵐に（3383）

秋

むら柴に雉子立つなり桜狩花散る野辺の春のあけぼの（3384）

前歌「峰の嵐」は紅葉を散らせるもので、「足曳きの山の紅葉は散りにけり嵐の先に見てましものを」（後撰・秋四一一　読人不知）に拠る。私と一緒に鹿よ鳴け、峰吹く嵐に紅葉が散る暮秋にの意。後歌「桜狩」は桜を尋ねて山野を遊び歩くことで、有名な俊成歌「又や見ん交野の御野の桜狩花の雪散る春の曙」（新古今・春一一四）に拠るもの。むら柴から雉が飛び立つことだ、春の曙に桜狩で花が散る野辺ではの意。

「紅葉散る山」「花散る野辺」という歌句の対照が看取できる。

④よしさらば涙にうとき身なりせば袖には月の宿らざらまし（3385）

同（秋）

行ふに真の言をならはずは心に月の宿らざらまし（3386）

前歌「涙にうとき身」は涙とは縁がない身のことで、「逢ひにあひてもの思ふ頃のわが袖に宿る月さへ濡るる顔なる」（古今・恋七五六　伊勢）に拠る。それならままよ、涙とは縁がない身なら、袖に月が宿ることはないであろうの意。後歌「真の言」は仏教語「真言」の訓読。如来の三密の一つで、深密秘奥の真実の語。「月」は悟りに至った心を喩えたもの。仏道修行するのに真言を習わなかったなら、心に悟りを得ることがないだろうにの意。

「月の宿らざらまし」という反実仮想の詩型の類似が見られる。

⑤散りつもる庭の紅葉に霜さえて赤きは月の光なりけり（3387）

同（秋）

月影に雪掻きわけて見る梅の白きにも猶染む心かな（3388）

前歌は、霜に明るい月光が反射すると白く見えるが、それに紅葉の色が加わるので「明き」を掛けて、「あかき」と表現している。散り積もった落葉に霜が冴え冴えと置き、それに月の光が加わり、あかく見えるの意。後歌は白梅の上を雪のように見える月光が覆っているさまで、「春歌」。白梅の上を雪のように見える月光が覆っており、心に深く感じるの意。

「月の光」に拠る色の変化という歌句に対照が見られる。また部立の表記は右歌に拠るものなので、和歌文学大系「月光と雪が覆っているさま」「当該歌は冬歌で不審」を訂正したい。

⑥月影のあらしになびく有明にうち合せたる鐘の音かな（3389）

同（秋）

いつはりと思知りぬる槇の戸にさしあはせたる鳥の声哉（3390）

前歌は、「有明の月待ち出でて明かぬ間にいかにや鐘の音の聞こゆる」（教長集四三九）などに拠り、嵐に吹かれ有明の月の光が横ざまに乱れ流れるように感じられる時に、折からの鐘の音が聞こえるの意。後歌「いつはり」とは「おしなべて叩く水鶏におどろかば上の空なる月もこそ入れ」（源氏物語・澪標二五七）などに拠り、水鶏の鳴き声が戸を叩く音に似ていることをいう。槇の戸では偽りの叩く音がしているが、重ね合わせるように鳥の鳴き声が聞こえてくるの意。

「～あはせたる～かな」という詩型の類似が見られる。

⑦世の中の人の心を思ふ空の雲かき分くる山の端の月（3393）

同（秋）

違はずよ憂き世の人の振舞ひはしぐるゝ秋の山の端の雲（3394）

前歌は「日吉百首」重複歌（2048）で三～五句「思ふ空にはかに月の雲隠れゆく」。「人の心」は衆生の煩悩に悩む心で、「暗きより暗き道にぞ入りぬべき遙かに照らせ山の端の月」（拾遺・哀傷一三四二　和泉式部）など山の端にかかる真如の月を詠む。世の中の人の心中を慮っている時に見上げる空に、雲を掻き分け山の端に月が出ることだの意。後歌は、衆生の行為こそが、仏の比喩である「月」を隠す時雨の秋雲のようなもの、間違いないの意。

「山の端の月」「山の端の雲」という歌句の対照が見られる。

⑧秋ふくる木の葉の色に待つ時雨一めぐりせば山の下風（3397）

同（秋）

思へたゞあだなる物は人の命野分の風に萩の上風（3398）

前歌「時雨」は木の葉を色付かせ、散らせるもの。「山の下風」は「踏みしだき行かまくをしき紅葉ばに道踏みわけよ山の下風」（清輔集一九四）に拠り、山から吹きおろしてくる風のこと。秋が更け木の葉を色付かせる時雨が一通り廻ったなら、山から吹き下ろす風に散ることだろうの意。後歌「人の命」のはかなさの比喩で、野分に吹かれて、萩の上に置いた露が落ちるという危うさを詠む。人の命は野分に吹かれて、萩の上の露が落ちるようにはかないもので、そのことをただひたすら想像してみなさいの意。

「山の下風」「萩の上風」という歌句の対照が見られる。

⑨神無月雲にあはれを吹そへて梢に渡る夕あらしかな（3401）

冬

吉野山花にあはれは思なれぬ色づく野辺に春風の吹（3402）

前歌は、神無月を覆う雲にしみじみとした情趣を吹き加えて、梢を移動する夕あらしよの意。後歌二・三句は花にしみじみとした情趣は心に思い慣れてしまい、草紅葉に色づいた野辺に春風が吹くように感じるの意。

「雲にあはれ」「花にあはれ」という歌句の対照が見られる。

⑩法の水に深き心は山の井の結しづくも濁らざるらん（3419）

釈教

今はわれ浅き心を忘水いつ掘兼の井筒ならなん（3420）

前歌「法の水」は「法水」の訓読で、仏の教えの比喩。その本歌は

「結ぶ手のしづくに濁る山の井のあかでも人に別れぬるかな」（古今・離別四〇四　紀貫之）。下句は手にすくう水の雫も濁らないであろうの意。後歌「忘水」は野中などの茂みに隠れて。人目に付かない流れのこと。また「堀兼の井筒」は広場に大きな穴を掘り、地下水が湧き出るまで渦巻き状の踏み付け道を造って掘り下げてゆく井戸のことで、仏教に対する信仰心を忘れ水から掘兼の井へと深めることに喩えた。

「深き心」「浅き心」という歌句の対照が見られる。

⑪後の世を思忘れて世に住まばこの世ばかりに楽しかりなん（3445）

同（述懐）

後の世を知る心こそ楽しきを苦しといふはいとゆふの空（3446）

前歌は後世のことを忘れて此の世に住むならば、此の世だけは楽しいに違いないの意。後歌「いとゆふ」は漢語「遊糸」に基づく語で、陽炎の異名。「霞晴れみどりの空ものどけくてあるかなきかに遊ぶ糸ゆふ」（和漢朗詠・晴四一五　読人不知）のように、実態のはっきりとせず、はかないことの比喩。

「後の世を～」という詩型の類似が見られる。

⑫わが心隠さじばやと思へども見る人もなし知るものもなし（3447）

同（述懐）

わが心隠さばやとぞ思へどもみな人の知るみな誰も見る（3448）

前歌は「日吉百首」重複歌（2058）で、五句「知る人もなし」。「隠さじばやと思へども」は隠すまいと思うけれどもの意。後歌も「日吉百首」重複歌（2059）で、「隠さばやと思へども」は隠したいものだと思うけれどもの意。前歌が宗教者の秘めた本心を詠むのに対して、後歌はそれと相反する宗教者としての立場を詠じているか。

「わが心隠さ～思へども」という詩型の類似が見られる。

⑬先の世を思知るより泣く涙今あが袖に乾く間もなし（3459）

同（述懐）

後の世は今宵か明日か泣く涙思ふばかりに猶ぞたまらぬ（3460）

前歌「乾く間もなし」は乾く間もなく涙で濡れていることで、「わが袖は水の下なる石なれや人に知られで乾く間もなし」（和泉式部集九四）。後歌の初・二句は命が尽きるのは今宵なのか、明日なのかの意。「猶ぞたまらぬ」はさらに留まらないで涙が零れ出すことだの意。

「先の世」「後の世」という歌句の対照が見られる。

以上、両百首における対照を為す歌の組み合わせを具体的に検討してきたが、概して歌句の対照や詩型の類似における実態は理解し易い。

残る課題は、前掲の（a）類に見るような、西山隠棲中における著述活動に関する対比と思われるので、両百首に存する重要な組み合わせを詳述したい。

三悪の家には何か帰るべき出でにし物を五相成身（3427）

（第三句「かへるへき」に「本ニかくるへきトアリ、帰るへき歟」の傍記）

同（釈教）

かならずよ夜半の煙と身をばなせ以字焼字の法のむくいに（3428）

（下部に「以之為遺戒」。歌自体は細字行間に補入）

前歌「三悪の家」は仏教語「三悪道」のことで、この世での悪業により来世で落ちる三悪道（地獄道・餓鬼道・畜生道）。「さんまく」とも。「五相成身」は金剛界大日如来に対する行者の精神作用の五段階の観想（五相）を完成させて、即身成仏を達成すること。三悪道にはどうして帰ることが出来ようか、出家したからには五相成身（即身成仏）を目指すべきだの意。

また重複する日吉百首（2080）では「今は世も迷も捨て六の道にかへらし物を五相成身」（初・二句「世も迷も捨て」見せ消ち、「よもまとひすてゝし」校異）となっており、今は世も迷妄も捨てて六道に帰るまいと思うのに、そう思うなら五相成身を目指そうの意。異文「よもまとひすてゝし（世も惑ひ捨てゝし）」では、この世も心の乱れも捨ててしまっての意となる。

これに対して、後歌「夜半の煙」は火葬の煙のこと。「旅の空夜半のけぶりと上りなば海人の藻塩火たくやとや見ん」（後拾遺・羇旅五〇三　花山院）。「以字焼字」は胎蔵界の五輪成身観によるもので、本有の仏性を顕現せしむること。必ず我が身を夜半の煙と成すのだ、五輪成身観の法の果報での意。

ここで金剛界の五相成身観および胎蔵界の五輪成身観について述べておきたい。五輪成身観および五相成身観については、慈円の著述『法華別帖』[9]に、

問。以此観曼荼羅為入三摩地。常行法之義不似歟如何。
答。凡入三摩地者。本尊行者同體観也。胎蔵五輪成身念満足句。金界五相成身観身為本尊。是皆入三摩地。此成身皆道場観以前令入三摩地也。両部之軌心。胎四所輪布字百光王等後又在之。金ニハ五相成身之外又別無入三摩地也。胎ハ一往先修因向果行法也。仍五輪之成身。先観性得本有之理性了後。修得布字観在之。但此胎ニモ有従本垂迹之義。此時四所輪布字八印等遍智院之前結之云々
金ハ自元従本垂迹之行法也。仍念誦前無別入三摩地。別尊法之時。観種子三形根本印所別用入三摩地。是行者為所観易心得。一途説用来也

と見える。三摩地という悟りのための精神統一の行を行うことを述べ、仏の性得本有の仏性の上に修得の布字観（阿字観など）を行ずる、つまり胎蔵界の五輪成身観と金剛界の五相成身観との相即の上に成佛を期する立場が記されている。胎蔵界は修因向果の行法、金剛界は従本垂迹の行法と説くのだが、多賀宗隼に拠れば、この「修因向果・従本垂迹」という教説は安然に基づくとして、安然『教時問答』（巻二）の次の一節を掲げる。

凡真言宗曼荼羅義略有二種。一者従本垂迹曼荼羅。是一切諸佛内証外化之三輪也。釈迦一代亦攝此中。諸宗就此釋種種身。二者修因向果曼荼羅。是一切行人。従凡入聖之三密也。釈迦所化亦攝此中。諸宗就此釋種種行。（大正新修大蔵経七五巻三九八頁・天台宗

叢書七三頁）

また五輪成身観についても、多賀は安然『瑜祇経修行法』（二巻）の一節を引用しているが[10]、これについては別稿に譲ることにしたい。

ところで略秘贈答が浅略深秘の約ということを冒頭で述べたが、浅略あるいは深秘という文言が彼慈円の著述の中に頻出する。

＊爾時毘盧迹那仏。在蓮華蔵世界。與千萬億化身釈迦牟尼仏。説心地尸羅淨行品教菩薩法証菩提道文　此初段説自証心地戒法秘密也。而**浅略深秘**二義在之。先**浅略**如文相。梵網心地戒品意在之。**深秘**者。金剛界頂宗秘密心地戒品依三密義或説之。義決文其意分明也。

（『秘相承集[11]』）

＊此次聊可記開悟事。一切諸人以阿弥陀為後世菩提之本尊。諸教所讃多在弥陀。故以西方而為一准云々　是或四十八願荘厳浄土之心。最後来迎十念具足之義。或法蔵比丘無上念王等本願。以如此事為基本歟。誠以浅略也。真言行者。尤可悟深秘之心也。今以阿弥陀翻無量寿。今延命常住之義。尤可符合。報仏之智恵。虚空之月輪。蓮花部教主。成菩提之西方。妙観察智之心。声塵得果之国。凡非此土者。凡夫初心之行者。欣求何浄土哉。**愚者信浅略之義。何況覚者悟深秘之旨哉**。先生此国之後。可傳入寂光海會也。

（『毘逝　別（下）[12]』）

＊法花法事

仰云。此法含用諸法義理。先行法合三部大法。本尊三身即一仏也。三身亦三宝也。仏法僧如次。又教主釈尊是仏法也。妙経不見是法僧也。但法寶言説ナルカ故似無體相。然而今不見菩薩即約理辺。法花ノ體質是法寶スカタ也。約事亦是僧寶也

護摩本尊段。誦三身三戒等並請釈迦普賢。是則具三身於一身収三宝一法。妙経法寶因果二質也。今真言之中具備一乗ノ妙理。故縮八軸妙文用三身真言。是誦此真言供此尊即誦法花経供法花経也。勧請詞此事。本尊釈迦尊。妙法蓮花経。不見大聖尊可請也。若依此心。爐中釈迦普賢並座。其前安経巻可観歟。而一師説可請供黄紙朱軸経云々　是浅略義也

次案**深秘**意。勧請詞唱妙法蓮花経。只二尊外別経體不可観置歟。今二尊已本跡二門二

質也。今真言又八軸肝心也。依之誦此真言妙経功徳自備。供此尊法花経義理無闕。為深秘義歟。

（『四帖秘決』一・一六二[13]）

＊熾盛光印事

承元二年三月二十九日仰云。真言教大意。**諸尊皆大日如来同體也**イフ事。學者存知大略一同也。但具論之。付之可有浅深也。所謂金輪・仏眼・尊勝・愛染・熾盛光等是深也。如観音・地蔵・弥勒等ハ浅也。以此心可察餘尊。又付行法可有浅深。所謂瑜祇経行法是深也。不入此浅也。其浅手本聖観音軌也。其故出大日一印。以之表同體。然而又行法首尾未必出深秘。於瑜祇経者始終顕秘旨。

大日如来己証也。然以両書為本修行分際浅深分明也。・・以瑜祇為本イハ行位等印結五輪五相等加彼**秘秘中深秘**行法等也。以此等心熾盛光根本印所上件深秘意結アラハス也云々

熾盛光印

先無所不至印明（是本地大日也）

次金輪印明四

智拳印一字明　勝身印三字明　剣印三字　鉢印一字

是大日如来現仏頂給心也。釈迦大日両金輪同體之義也

（『四帖秘決』三・四七）

右のような文言は、跋文に「文治六年十一月」とある著述『自行私記』（和尚御次第、外題云「八深秘」[14]）や、逆に「承久元年」執筆とされる『本尊縁起』[15]にも「浅略深秘秘中深秘、秘々中深秘」と見えるので、生涯を通して叡山教学における解釈「四重秘釋」に拠って、思索の分類を成していたのであろう。すなわち**浅略**釋（表面的な解釈）・**深秘**釋（深い趣旨を見出す解釈）・**秘中の深秘**釋（表面的と深遠との両者を超えた解釈）・**秘秘中の秘**釋（厳守のほかに深遠なものはないと悟る解釈）に拠る。ともあれ西山隠棲期に集中する著述に頻出していることは注目してよい。

最後に、紙数も尽きたので、叡山教学における慈円著述がいかに叡山教学に基づいているのか、しかもそれが安然の教説に拠っていることについては改めて検討したい。ここでは慈円の叡山教学に関する教説として、五大院安然に基づいていることの証を『續天台宗全書』（密教3）を中心に提示しておきたい。

＊今経題名。清浄法身毘盧迹那仏者。絶方処中台法界體性智所具五智一體大日也。故此経正説段清浄法界中教主。中台一智説法也。大日経等。内証五智一體一智説法也。常世間学者等。自性内証分別無之。唯八葉中台一具自性思無下事也。内証八葉五智望中台自性五智成他受用也。准餘教自受用也。此内証八葉自受用出色界頂。形貌他受用形相。故五大院。大日経教主現他受用説自受用法門釈也。凡今経超瑜祇経等也。瑜祇秘密教中相対門至極説。其故両部理智相対也。而瑜祇経。理智相対而説不二極理。故煩悩即菩提。無明則法性源奥。即時而真極秘。唯在瑜祇経。愛染染愛秘密。仏願部母極理。煩悩御即菩提・菩提即煩悩。

（『**秘相承集**』三七頁）

＊問。密教大旨大日定印。其説文以右置左上。而今何違常途密教之義乎。以邪押正意甚不可也。如何

答。五大院和尚決此疑云。天台大師定印口決（安然記）

（『別行経抄上』五五頁）

＊五大胎蔵界五輪成身意也。是等皆為事於面兼理意也。故五大院釈云。両部為理於面兼　事。蘇悉地為事於面兼理云々　即此意也

（『別行経抄下』七八頁）

＊灌頂瓶水事（●は梵字、以下同様）

顕教元品無明断事。等覚智断歟。妙覚智断歟云事。天台宗大大大

事也。而今支分生真言者●●也。以此普賢印明令灌頂。自通顕教之談者歟。然以等覚智断之也。但其智者妙覚智下加也・・

金剛薩埵者。大日所変事業成就身也。是則妙覚之中等覚也。因之瑜祇経行法。大日成薩埵身薩埵成本尊身。何尊行法深行阿闍梨。可用此仏眼大成就品至第之由。師師口伝也云々・・

次用八印事。又五大院和尚意也。**胎蔵秘密不顕之。金界灌頂曼陀羅分明説顕**。仍准金界用此説。何況祖師常用給此説云々・・

凡真言教之習常用重點。重用之。全不可背教意歟。何況用支分生一印之時。本尊灌頂作法無之。只大日等覚智瓶水弟子頂上灌則座除断元品無明。令証得大覚朗然之位也。以之為灌頂之本意。其上又四智四行無所不至等功徳重灌顕。事次第相叶其理。可然歟・・

次又両説出来者。共不棄之。皆可用事**浅略深秘**等之議。令出来也。而我宗之至極大事。無過灌頂大法。至此事而二説難思議也。・・

凡以灌一滴水於頂上。称密教至極灌頂。秘教之本懐在之云々　浅智人不得其意。又不信也。悲哉悲哉。可知。以出過語言道之●水。灌我覚本不生之●灰。諸過得解脱之火。遠離於因果之風。萌仏牙於虚空。証究竟之仏果。是當教之至極也。勿致疑網。浅智仰可信之。深智習可悟之。重委論之。●字方壇大地也。

真俗二諦。依正二法。浄土穢土。界内界外。併無不出生此●字。

此●字之中有●●●●之四字。此●智火出自●字之中還焼●字。以字焼字云是也。俗諦有漏之迷状萬法悉焼尽訖。●字同體出世無漏灰成訖。此灰上以●字智水灌之。解脱之風。扇空界之時。究竟成佛種子。忽以令生長也・・

又今教以瑜祇経與別行経為至極也。瑜祇経両部肝心也。毘盧遮那別行経蘇悉地肝心也。両部肝心者。瑜祇経仏眼大成就品説成身行法。用行位薩埵仏眼八字。以此四ケ印明存七分行法。其功能広可勘見之。胎蔵八字明加●字。師資口伝秘。何事如之哉。但対記分明也。**大日変作薩埵身。薩埵又変成佛眼部母身。此仏眼部母者。則是胎蔵界大日身也**。薩埵経歴両部。成事業身也云々　自此仏眼部母身出生十凝誐沙倶胝仏云々

師説云。此出生仏釈迦金輪也云々　凡此行法次第学真言教教相生義吉吉可心得知也。胎蔵理曼荼羅云々　此理者中台大日●字之本源也。凡一切萬物。無不出生是。以出生之義。名胎蔵。即名詮自性者。如此名也。此胎蔵●字大日。金界●字大日令出生。是従本垂迹之源也。此金大日先現事業身。又還成部母身。**此仏眼胎蔵大日也**。教時義云。**胎大日亦名仏眼云々**　已其義分明也。自此部母身出生諸佛。是**釈迦金輪也**云々　**釈迦如来亦名金輪也**

（『毘逝　別（上）』二一一二頁）

＊胎蔵金剛蘇悉地灌頂護摩等一切行。以之可准知也云々。略抄

（『**毘逝　別（下）**』二三七頁）

＊今一字金輪云尊。大日釈迦令合成尊也。是則金剛界大日也。佛眼云則胎蔵大日也（教時義云。**亦名佛眼**）。令成就此合身女身也。世諦陰陽也。世界天地。此女身自何所出生哉。従虚空出生。

仍云虚空眼以●字為種子（或●或●）。委論之言語難及

（『法華　別帖』二六一頁）

＊四・八二

三種意生身事（私云。桂林房阿闍梨瑜等指示也）

仰云。件因昨今披見祖師抄物。被書付タルハ。教時義二引元暁楞伽疏云。法身有二。一自性法身。本有法性也。二意成法身。成正覚時以一切法為自身也云々　以之思之。五輪成身意成身可依此意歟

真言宗三種生身極大事ナリト先師所示也。仍失顕教歟（已上彼抄物文也）

見此文案之。秘教意三種意生身トイハ。三身成身也可心得歟。所謂法身成身。胎五輪成身也

以五輪成身意生身云事。入秘密曼荼羅品義釋見タリ。虚心記引之

報身成身。金五相成身也

以報仏成道為本故也。仍一往義相叶歟

応神ノ意ハ。成無漏界之時。依三諦ノ理観其生三種也。指之為三意生身。是通教義也

真言教ノ意ハ。界内依身上三仏即身成仏観所闕諸教歟。仰趣大略如此耳

私云。教時文広可見之

（『四帖秘決』四・八二）

以上、五大院安然（「教時義」「略抄」を含む）に関する記事を拾ってみたが、もちろん、その他に、雙林寺僧正（全玄）（『四帖秘決』一・七七、二・三九、二・六六）・聖昭（『四帖秘決』二・八、四・八六）・観性法橋（『四帖秘決』二・八、二・二四、四・一）など叡山の伝燈の灌頂相承に関わる人物の名前も見えることを付け加えておきたい。

本百首にみる慈円の真言に関する研鑽は次の一首に集約しているのではないだろうか。言い換えると、「略秘贈答和謌百首」は名称の示す通り密教研究の成果を取り扱ったものと言えるのではないだろうか。

行ふに真の言をならはずは心に月の宿らざらまし（3386）

〔注〕

(1) 拙稿「慈円『建暦三年日吉百首』考（徳島文理大学文学論叢2号・昭60→『慈円和歌論考』笠間書院・平10）参照。

(2) 青蓮院本『拾玉集』に拠れば、その内題の右下に「本ニハ二首ツヽ載之。其間哥一首斗程闕在之」の注記があり、この百首の呼称が贈答歌形態（二首で一対をなす）に由来することを確認できる。二首の中間上部に「春」以下の部立が書き込まれている。但し、青蓮院本・高松宮本共に混乱があるので、欠落することもある。）

多賀宗隼『校本拾玉集』の逸脱を青蓮院本写真版で補訂。本文の性質上、十題百首・廿題百首を欠脱する他、本文的に種々の問題を抱える『新編国歌大観』ではなく、歌本文・番号は青蓮院本を底本とする『校本拾玉集』に拠るので、注意されたい。

ここで略秘贈答和謌百首の青蓮院本写真版に拠る補訂を掲げておきたい。

（但し、押紙は除く。）

三五八二・三五八三中央上部に「〇本」（三五八二肩の「春」が〇の位置にあること）補入。

三五八四・三五八五中央上部に「本同」補入。

三五九〇・三五九一中央上部に「同」補入。

三六一〇・三六一一中央上部に「同」補入。

三六一七・三六一九の肩にある「同」除去。

三六三〇・三六三一中央上部に「閑居」補入。

三六三一注記「四首落歟。奥ニ書入之」上部に「〇神祇」「〇同」補入。

三六四一及び三六五〇は細字で行間に書入れらる。

三六四二第五句「世をはすてむ」→「世をはすてなむ」

三六五七・三六五九・三六六一の肩にある「国」→「同」。

三六六〇・三六六一中央上部に「同」補入。

三六六二初句「おもはやと」→「おもはしと」

三六六二・三六六三中央上部に「同」補入。

三六六七左肩「〇本」→初句に「本」傍記（「正本」本文が初句通りであること）。

三六七〇・三六七一中央上部に「同」補入。

三六七一と三六七四の歌順の交代を指示する記号。（三六七一第二句「なになきちり」の振り仮名）。

三六七五後の「〇本」除去。

三六七八初句に「本」傍記（「正本」本文が初句通りであること）。

三六八〇・三六八一中央上部に「同」補入。

三六八三第三句「殊す霜は」→「残す霜は」

(3) 青蓮院本には三六四一歌の後に注記「四首落歟。奥ニ書入之」が見え、底本に無いので奥に補足したことが分かる。跋後に注記「閑居之次此二首証本在之落歟。仍書入之」と神祇四首（三六六七～三六八〇）を記している。青蓮院本と同系統の国立歴史民俗博物館蔵高松宮本（る・二四九）などでは「正本」の指示通り「閑居」の次に確かに収録されている。

(4) 秋一一の組み合わせ中の三五九六・三五九七では左歌「むら柴に雉立つなり桜狩花散る野辺の春のあけぼの」は「春」である。此例からも右歌の季節に従って分類されているようである。ちなみに三五九六「暮の秋」に対して「春の曙」が配されたもの。

(5) 「三五八六・三五八七」「三五九八・三六一四」「三六一一a・三六一二・三五九六・三五九七a」「三六一六a・三六一七・三六一八・三五九九・三六一九・三六二四・三六二五・三六二六・三六二七（以上九首以校本書入之）」「三六三三・三六三五・三六三六」「五一三八・二四六三a・三九八四a・三六四二・三六四三・二二一六・五一六四・三五八四・三五八五（此本六十首詠改了。勿論之。但本数百六十六首歟）（裏書・・以上任本書入之）」「三六四四・三六四五・三六四六・三六五四・三六五五・三六五六・三六五七・三六五八（裏書・・以上八首以校本書入之。但以上八首略秘贈答百首中ニ入之御哥也）」「三六七四・三六七二・三六七三・三六七一（裏書・・以上四首以校本書入之。但四首悉略秘贈答百首哥也）」「三六七八a・三六七九・三六八一」

(6) 例えば三六七一歌と三六七四歌の交代を指示する記号があり、「正本」は「三六七四・三六七二・三六七三・三六七一」の歌序であることが分かる（八件めの押紙と合致）。

(7) 三五八二（日吉百首二二二二）・三五八六（同二二一八）・三六〇〇（同二二一七）・三六三四（同二二八一）・三六四一（同二二八五）・三六四三（同二二七五）・三六六六（同二二四二）・三六六七（同二二四三）・三六七〇（同二二五七）・三六七五（同二二七七）・三六七六（同二二七二）・三六七七（同二二七三）・三六七八（同二二八六）・三六七九（同二二八七）・三六八〇（同

二二九四）・三六八六（同二二九七）・三六八四（同二二九八）

(8) 拙稿（同注2）参照。

(9) 吉水蔵「法華　別帖」は続天台宗全書『密教3（経典註釋類Ⅱ）』に拠る。末尾に「承元四年九月二十九日。於西山御所。法花三帖給了。即出裏了。同十月十四日。於岡崎房書写了。自去四日天変御祈熾盛光法伴僧勤仕之間。速速恩恩。仍書写遅遅也　求法仏子成源」という書写奥書が見え、また表紙に「秘秘中深秘也、穴賢穴賢不可他見」と記される。内容については、多賀宗隼『慈圓の研究』（吉川弘文館・昭55）参照。

(10) 五大院安然著『教時問答』は別に『教時義』『真言宗教時問答』とも言い、『教時諍論』二巻、『胎蔵金剛菩提心義略問答抄』一〇巻と併せて、台密教判の集大成といえよう。『大正新修大蔵経』七五巻（續諸宗部）及び『天台宗叢書』に拠る。内容については多賀宗隼『慈圓の研究』（吉川弘文館・昭55）参照。

(11) 三千院圓融蔵「秘相承集」は続天台宗全書『密教3（経典註釋類Ⅱ）』に拠るが、特に書写奥書が見えない。

(12) 吉水蔵「毘逝　別」は続天台宗全書『密教3（経典註釋類Ⅱ）』に拠る。末尾に「承元三年己巳六月。於西山草庵。書之了」という書写奥書が見える。また表紙に「極、深、秘、秘、」と記される。

(13) 青蓮院蔵「四帖秘決」は続天台宗全書『密教3（経典註釋類Ⅱ）』に拠る。巻頭に「鎮和尚御口伝　慈賢筆　篇目道覚親王真蹟也」という記述が見える。

(14) 叡山南渓蔵「八深秘」は「自行私記」ともいい、多賀宗隼「法橋観性について　―とくに慈円との関係―」（歴史地理90巻1・昭36→『慈圓の研究』）参照。

文治六年十一月日、為成仏欲修此行法、仍為暗（諳カ）誦書之、努々穴賢、非機人借謬莫令見知之、南无金剛薩埵、返々守護給、此行法大日経不説之、瑜祇経仏眼品雖説之、猶於委細秘而不明之、只師資口伝也、哀哉々々、慈覚大師十三代師資口伝、大日如来三密修行、成仏之期在近、可思之、私云、自大成就品出修行此法之時、仏眼種智真空冥寂如来如実知見三界之相、無有生死之故也、即身成仏一生妙覚之真因、只可在此行法、深可信仰、終焉之時、敢不可廃之　金剛仏子慈―

但し、著書には右の跋文は省略されており、またこの叡山南渓蔵本は曼殊院本に拠って「文治六年二月」と修正すべきと記されている。

(15) 吉水蔵「本尊縁起」は多賀宗隼『慈圓の研究』に全文引用。末尾に「小僧出家受戒之後、・・及七旬」「太上天皇自十一歳御元服之時、今令四十宝算給也」とあり、起草者は慈円、承久元年の著作であることは確実である。